

## ■ライバル対決、北海道大が北海学園大に逆転勝利。春季オープン戦

北海道学生アメリカンフットボール連盟加盟校の春季オープン戦は第4日の7月10日、札幌市清田区の北海学園清田グラウンドのラグビー場で、北海学園大ー北海道大戦が行われ、北海道大が15ー13で逆転勝ちした。北海道大が北海学園大に勝利したのは2019年秋の道学生選手権以来。春季オープン戦は最終日の7月17日、札幌大グラウンドで室蘭工業大ー札幌大・北海道科学大・北海道医療大合同チームの対戦を行い、全日程を終了する。

2020年、2021年と道学生選手権を2連覇中の北海学園大と、道学生選手権で過去26回の優勝を誇る北海道大。秋の道学生選手権の前哨戦となるライバル対決は、この日も最後まで勝負の行方が分からない大接戦となった。

先手を取ったのは北海学園大。第1Q10分、LB池原響生（2年、伊達緑丘高）のインターセプトで攻撃権を得ると、RB高杉武生（2年、浦河高）の5ヤードランと、QB河合祐輔（4年、札幌第一高）からWR寺川隆吾（4年、北海高）へ35ヤードTDパスであっさり先制。PATのキックも決まり7ー0とした。第2Q7分には、自陣15ヤードからの攻撃でRB高杉のラン、WR寺川とWR野本了輔（3年、札幌大谷高）へのパスなどでボールを運び、最後はQB河合が4ヤードをキープしてTD。13ー0とリードを広げた。

北海道大の反撃は第3Q3分。自陣40ヤードからの攻撃で、RB鈴木優太（4年、東京・桐朋高）のランを軸に、パントの場面でも北海学園大のファンブルで攻撃権をつなぐ幸運もあり、敵陣5ヤードへ。最後もRB鈴木が左オフタックルを突いてエンドゾーンに飛び込んだ。PATのキックは外したが13ー6と追い上げ開始。同8分には、WR/K日高耀（3年、福岡・北筑高）が22ヤードFGを決めて13ー9とした。

さらに、同10分にDB太田陽士（4年、埼玉・浦和高）のインターセプトで攻撃権を得ると、再びRB鈴木のランとWR宮崎大地（3年、兵庫・星陵高）へのパスなどでエンドゾーン目前まで前進。第4Q最初のプレーでQB茨木大輔（4年、兵庫・六甲学院高）が自ら飛び込んで、13ー15と逆転に成功した。

その後は北海道大の守備が奮闘。DL浅井聡太（3年、東京・都立西高）、DL大島夕輝（3年、札幌国際情報高）のQBサックやLB千葉克真（2年、埼玉・花咲徳栄高）の好タックル、DL清水英介（4年、東京・都立西高）のパスカット、LB坂田宙斗主将（4年、東京・小山台高）のQBサックなどが相次ぎ、北海学園大の追撃を封じた。

北海道大の里見佑三監督は「後半、守備チームがうまくアジャストでき、北海学園大のパス





攻撃を防げた。秋に向けて、まだまだミスが多いので減らしたい。タックルやヒットなどもしっかりと仕上げたい。オフ明けから本番までの6週間、メリハリある練習で鍛えたい」と春シーズンを総括した。司令塔のQB茨木は「2本差を追いつけたが、スロースターターが課題。きょうはディフェンスに助けられた」と反省し、坂田主将も「インターセプトからの失点が春の課題になった。夏の練習でランと守備をもっと強化したい」と力を込めた。

一方、北海学園大の高木幸樹ヘッドコーチは「けが人が多く、フルメンバーではなかったが、ミスも多かった。秋に向けて一生懸命走り、当たることを、もう一度徹底したい」と宣言。QB河合も「前半は準備したプレーを出せたが、後半は自分たちの弱さが出た。東北大に勝った北大に、自分たちの力を見せたかったので残念」と巻き返しを誓っていた。